TADOKU JUNIOR　せかいのなぜなに神話　★★★☆☆ ふつう　669語

Why the Evergreen Trees never lose their Leaves

どうして常緑樹は葉を落とさないの？

Florence Holbrook（1902年の本）　原文そのまま　朗読：Ritu Aarcee

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　つばさがおれて南へとべない小鳥が、冬の森で木々にたすけをたのみます。ことわる木、むかえてくれる木……冬が来ると？

Winter was coming, and the birds had flown far to the south, where the air was warm and they could find berries to eat. One little bird had broken its wing and could not fly with the others. It was alone in the cold world of frost and snow. The forest looked warm, and it made its way to the trees as well as it could, to ask for help.

First it came to a birch-tree. "Beautiful birch-tree," it said, "my wing is broken, and my friends have flown away. May I live among your branches till they come back to me?"

"No, indeed," answered the birch-tree, drawing her fair green leaves away. "We of the great forest have our own birds to help. I can do nothing for you."

"The birch is not very strong," said the little bird to itself, "and it might be that she could not hold me easily. I will ask the oak." So the bird said, "Great oak-tree, you are so strong, will you not let me live on your boughs till my friends come back in the springtime?"

"In the springtime!" cried the oak. "That is a long way off. How do I know what you might do in all that time? Birds are always looking for something to eat, and you might even eat up some of my acorns."

"It may be that the willow will be kind to me," thought the bird, and it said, "Gentle willow, my wing is broken, and I could not fly to the south with the other birds. May I live on your branches till the springtime?"

The willow did not look gentle then, for she drew herself up proudly and said, "Indeed, I do not know you, and we willows never talk to people whom we do not know. Very likely there are trees somewhere that will take in strange birds. Leave me at once."

The poor little bird did not know what to do. Its wing was not yet strong, but it began to fly away as well as it could. Before it had gone far, a voice was heard. "Little bird," it said, "where are you going?"

"Indeed, I do not know," answered the bird sadly. "I am very cold."

"Come right here, then," said the friendly spruce-tree, for it was her voice that had called. "You shall live on my warmest branch all winter if you choose."

"Will you really let me?" asked the little bird eagerly.

"Indeed, I will," answered the kind-hearted spruce-tree. "If your friends have flown away, it is time for the trees to help you. Here is the branch where my leaves are thickest and softest."

"My branches are not very thick," said the friendly pine-tree, "but I am big and strong, and I can keep the north wind from you and the spruce."

"I can help too," said a little juniper-tree. "I can give you berries all winter long, and every bird knows that juniper berries are good."



So the spruce gave the lonely little bird a home, the pine kept the cold north wind away from it, and the juniper gave it berries to eat.

The other trees looked on and talked together wisely.

"I would not have strange birds on my boughs," said the birch.

"I shall not give my acorns away for any one," said the oak.

"I never have anything to do with strangers," said the willow, and the three trees drew their leaves closely about them.

In the morning all those shining green leaves lay on the ground, for a cold north wind had come in the night, and every leaf that it touched fell from the tree.

"May I touch every leaf in the forest?" asked the wind in its frolic.

"No," said the frost king. "The trees that have been kind to the little bird with the broken wing may keep their leaves."

This is why the leaves of the spruce, the pine, and the juniper are always green.

和訳 どうして常緑樹は葉を落とさないの？（Why the Evergreen Trees never lose their Leaves）

冬が近づき、鳥たちは南の遠くへとんでいってしまいました。南は空気があたたかく、食べる木の実も見つかるからです。小さな鳥が一羽、つばさをおってしまって、みんなといっしょにとべませんでした。その鳥は、しもと雪のつめたい世界に、ひとりぼっちでした。森はあたたかそうに見えたので、小鳥はたすけをもとめて、がんばって木々のところまで行きました。

さいしょに、シラカバの木のところへ来ました。「美しいシラカバさん」と小鳥は言いました。「わたしはつばさがおれて、友だちはとんでいってしまいました。友だちがもどってくるまで、あなたのえだにすまわせてもらえませんか。」

「とんでもない」とシラカバは、きれいな緑の葉をひっこめながら答えました。「大きな森のわたしたちには、たすけてやる自分たちの鳥がいるのよ。あなたには何もしてあげられないわ。」

「シラカバはあまり強くないから」と小鳥はひとりごとを言いました。「わたしをささえるのはむずかしいのかもしれない。カシの木にたのんでみよう。」そこで小鳥は言いました。「大きなカシの木さん、あなたはとても強いですね。春に友だちがもどってくるまで、えだにすまわせてくれませんか。」

「春だって！」とカシの木はさけびました。「それはずいぶん先だ。そんなに長いあいだに、おまえが何をするかわかったものではない。鳥はいつも食べ物をさがしているからな。わしのどんぐりまで食べてしまうかもしれない。」

「ヤナギなら、やさしくしてくれるかもしれない」と小鳥は思って、言いました。「やさしいヤナギさん、わたしはつばさがおれて、ほかの鳥たちと南へとべなかったのです。春まで、あなたのえだにすまわせてもらえませんか。」

そのときのヤナギは、ちっともやさしそうではありませんでした。つんとむねをはって、こう言ったのです。「あなたなんか知らないわ。わたしたちヤナギは、知らない人とはけっして話さないの。知らない鳥をすまわせる木なら、どこかにあるでしょうよ。すぐに行ってちょうだい。」

かわいそうな小鳥は、どうしたらよいかわかりませんでした。つばさはまだ強くありませんでしたが、小鳥はできるだけがんばってとびはじめました。あまり遠くまで行かないうちに、声が聞こえました。「小鳥さん、どこへ行くの？」

「わからないんです」と小鳥はかなしそうに答えました。「とても寒いんです。」

「それなら、ここへおいで」と、親切なトウヒの木が言いました。よびかけたのは、トウヒだったのです。「よかったら、冬のあいだ、わたしのいちばんあたたかいえだにすむといいわ。」

「本当にいいんですか？」と小鳥はうれしそうに聞きました。

「ええ、いいですとも」と、心のやさしいトウヒは答えました。「友だちがとんでいってしまったのなら、今こそ木がたすけてあげるときよ。ここが、わたしの葉がいちばんしげっていて、いちばんやわらかいえだよ。」

「わたしのえだはあまり太くないけれど」と親切なマツの木が言いました。「わたしは大きくて強いから、北風から小鳥さんとトウヒさんをまもってあげられるよ。」

「ぼくもてつだえるよ」と、小さなネズの木が言いました。「冬のあいだずっと、実をあげられるよ。ネズの実がおいしいことは、どの鳥だって知っているもの。」

こうして、トウヒはひとりぼっちの小鳥にすみかをあげ、マツはつめたい北風をふせぎ、ネズは食べる実をあげました。

ほかの木たちはそれをながめて、わけしり顔で話しあいました。

「わたしなら、知らない鳥をえだにのせたりしないわ」とシラカバが言いました。

「わしは、だれにもどんぐりをやらんぞ」とカシが言いました。

「わたしは知らない人とはかかわらないの」とヤナギが言い、三本の木は葉をぎゅっと体によせました。

朝になると、そのつやつやした緑の葉は、みんな地面に落ちていました。夜のうちにつめたい北風がやってきて、ふれた葉をみんな木から落としてしまったのです。

「森の葉っぱを、みんなさわってもいい？」と、風ははしゃいでたずねました。

「だめだ」と、しもの王さまは言いました。「つばさのおれた小鳥に親切にした木は、葉をのこしておいてよい。」

だから、トウヒとマツとネズの葉は、いつも緑なのです。

たんご と クイズ　どうして常緑樹は葉を落とさないの？

wing つばさ	**oak** カシ・ナラの木	**acorns** どんぐり
berries 木の実	**snow** 雪	**leaves** 葉っぱ
pine-tree マツの木		

Q1 小鳥が南へとべなかったのはどうして？

① つばさがおれたから　② ねぼうしたから　③ 道をわすれたから

Q2 冬のあいだ、小鳥にすみかをあげた木は？

① カシの木　② トウヒの木　③ ヤナギの木

Q3 シラカバ・カシ・ヤナギの葉は、朝どうなった？

① 金色になった　② もっとふえた　③ みんな地面に落ちた

こたえ

Q1 ① 小鳥はつばさをおってしまい、ほかの鳥たちといっしょにあたたかい南へとべなかったのです。

Q2 ② トウヒがあたたかいえだにすみかをあげ、マツは北風をふせぎ、ネズは実をあげました。

Q3 ③ 夜につめたい北風がふいて、ふれた葉をみんな落としてしまいました。親切にしなかった木たちです。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #22420（Florence Holbrook、1902年）。パブリックドメイン。
挿絵：(1902 edition)（同じ本の初版の挿絵。パブリックドメイン）
朗読（Web版）：Ritu Aarcee（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。